

## 釧路湿原の鳥しらべ隊！

貞國 利夫\*

釧路市立博物館々報第426号にて、「2023年に向けた釧路湿原の鳥類調査について」と題した記事を書かせていただきました。

2023年はラムサール条約第5回締約国会議(COP5：通称 釧路会議)が開催されてから30周年の年です。当時は様々な分野で生き物の調査が盛んに行われていたが、近年はどうだろうか。生き物に何か変化があるかもしれない、比較調査を始めてみよう。という内容です。

今年も調査は進めているのですが、その中で専門家だけでなく、地域の皆さんにも協力して頂きながら実施したいと思い、「釧路湿原の鳥しらべ隊」を募集しました。応募条件は、①野鳥観察経験のある方 もしくは ②ネイチャーガイドorそれを目指している方 を条件としました。野鳥の調査員なのに②の条件についてはやや疑問を持たれる方もいるかもしれません。今回は鳥を調べることが目的なので、全くの素人だとやや荷が重い内容です。しかし、釧路の観光業の一つとして重要な仕事である「ネイチャーガイド」を目指す方であれば、野鳥というコンテンツは切っても切り離せないものです。釧路の自然を案内するなら、目につきやすい野鳥の質問はお客さんからしやすいことでしょう。タンチョウはもちろんのこと、他の鳥類についても一定の知識・経験を持っていることが望ましいと考えられます。そこで、やや不慣れな方でもこの調査をきっかけに野鳥を覚えてもらえればという目論見から、②の条件も入れることになりました。

さて、調査の性質上、定員は2日間各5名で募集したところ、定員を超える20名以上の応募があり、想像以上に需要があることを知りました。また応募者は10代から70代と幅広く、若い年代が比較的多いことも意外でした。参加者へ応募動機を聞くと、その多くはガイド志望もしくはそのスキルアップとのことで、皆さん非常に意欲的でした。



写真1. 声や姿を1羽ずつ同定していきます。

調査の前に、まず事前講習会を開きました。調査目的、調査地や鳥の鳴き声の説明、当日のシミュレーション等を行い、調査日までに鳥の声をなるべく覚えるように伝えました。

そして調査当日です。鳥は早朝に鳴き声が活発になるため、調査開始時間は午前4時です。そのため、博物館集合は夜明け前でしたが、全員遅れることなく集まってくれました。車での移動後、現場へ着き降りると、いきなり野鳥たちによるさえずりのシャワーを浴びました。参加者たちも、想像以上の声の多さに驚くと共に喜んでいました。

調査方法は、1箇所場所で一定時間留まり、そこで出現した野鳥を記録する手法と、指定のルートを歩きながら出現した野鳥を記録する手法を併用して実施しました。参加者ははじめ、聞き慣れない鳥の声や素早く動く姿に翻弄されていましたが、参加者同士でコミュニケーションをとりながら、「今の姿はセンダイムシクイだね」「この声はシマセンニュウかな」と徐々に鳥を識別できるようになり、終盤になると主要な鳥はだいたい判るようになっていました。



写真2. 雨に降られることもありましたが、無事終わりました。

2日目は雨に降られることもありましたが、なんとか終えることができ、両日共に良い結果を得ることができました。調査中は鳥の記録をとるため参加者は必死ですが、その中でもオジロワシやチゴハヤブサなどの猛禽類が上空を通過したり、数多くのアマツバメが乱舞する様子、ノビタキの巣立ちビナが親の後をついていく姿など、鳥たちの暮らしぶりを堪能できたようです。

調査後のアンケートでは、調査前に比べて全員野鳥の姿や鳴き声を覚えることができたようで、「今後の活動へ生かします」とのありがたい言葉も頂けました。この調査は次年度も実施する予定で、調査結果は2023年度の「ラムサール展(仮題)」には紹介いたします。どのような成果が出るか楽しみです。